

手の小尾根上にルートをとる。すぐ稜線の林道に出る。

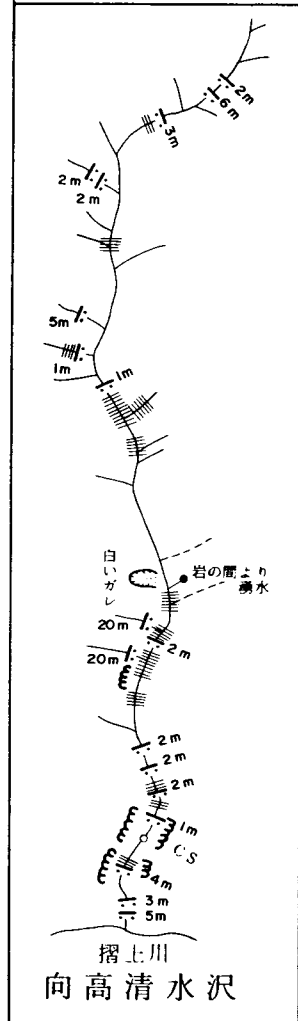
(記)

「タイム」 出合(一〇)

〇〇) ↓ 二俣(一一)

二〇) ~ 一一:五〇)

↓ 終了(一二:二五)



向高清水沢(仮称)

L-1

一九八三年五月二八日

国道三九九号線より唐沢を下降して摺上川本流へ下る。唐沢は本流へ出る所に二〇位の階段状の滝をかけたが、この滝は最後の部分が下れず、左岸を捲いて本流に降りたつ。そこから五〇位程下ると向高清水沢(仮称)の出合である。

向高清水沢(仮称)は出だしからいきなり五位滝が連続している。こんな時はワラジをつける気分も最高である。F6まで次々と滝が現れ、一気に高度をかせぐ。水量が少ないために難易度は初級というところで、あつという間に核心部を終わる。

このあと沢は平凡となって源流に至る。最後に小滝を二つ直登すると、もう尾根は間近であった。

この沢は釣り人もあまり入らないらしく、魚影も濃く、山菜も豊富だった。私の好きなオオルリ、サンコウチヨウにも会えた。近くの横枝に止まって、「月日屋ホイホイ」と歌っている。パラダイス・フライ・キヤッチャーという英名にふさわしいサンコウチヨウのオス。しなやかな尾羽根、目の周囲の鮮やかなコバル

ト。本当に良い山行であった。

(記：)

「タイム」 出合(一三・四五) ↓ 沢終

了(一六・二〇)

唐 沢

一九八三年五月三〇日

仕事で、山菜とりで、あるいは沢登りだと、摺上川の流に沿う国道三九九号線にはしょっちゅう車を走らせるのだが、この唐沢に水が流れているのを見たことはほとんどない。大雨のあとでもないかぎりいつも溜沢なのである。

一二時二〇分入谷。石のゴロゴロした溜沢の中を進む。一五分程で農道を横切って更に上流へ。一時間近く歩いた所で、前方から水音が聞こえてきた。ナメが出てくる。水はその岩床の上をサラサラと流れている。

水量は多くないが、サンシヨウウオなどのいるところをみると、絶えることのない流れのようである。下流では地下にしみこんで伏流となっているが、ここから先は岩盤が露出している。水も表面を流れるようになるのだらう。岸にはギボウシな

どの水気のある所を好む植物の姿も見られる。
ナメはずっと続いている。途中にある小滝はフリクシヨンをきかせてすべて直登。小さいので、特に問題となるものもない。所々崩壊した土砂が沢をうずめた所があり、そこはブッシュが通行の妨げとなっていた。
一四時、もう細い溝状となった沢をあとに樹林帯をつきつて上の牧草地をめざす。
沢の途中、白いガレのあるあたりでヒメサユリの花をみかけた。うすいピンクのひっそりとした花は、こ

